



所在地	〒263-8555 千葉県千葉市稲毛区穴川4-9-1
職員	1,318名（令和3年4月1日現在）
年間予算額	427億円（令和3年度）（核融合関係・次世代放射光関係補助金を含む）

研究所・事業所の
一覧はこちらから



採用サイトは
こちらから



可
能
性
を
生
む

、多様性がある。

国立研究開発法人

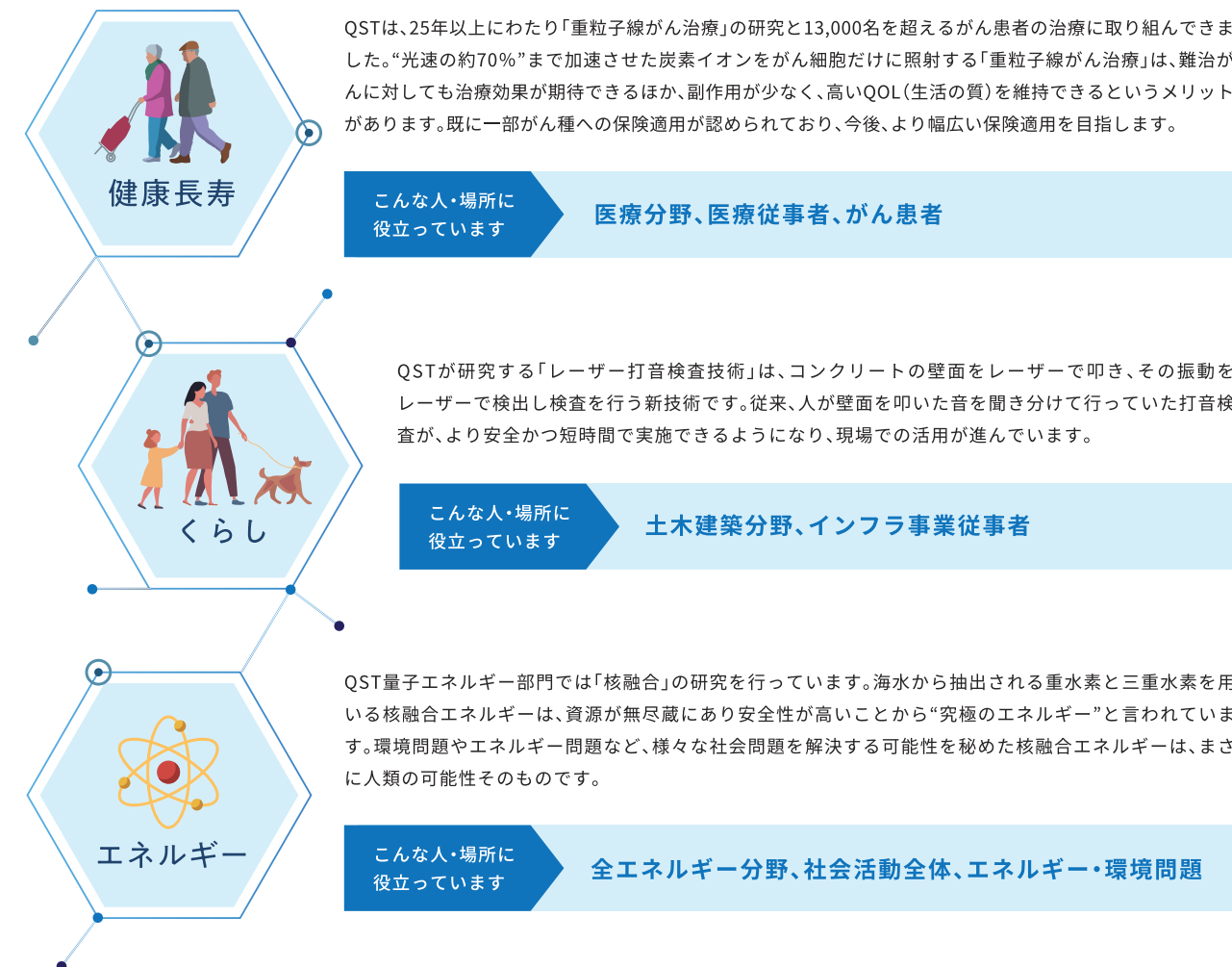
量子科学技術
研究開発機構

RECRUITING BOOK



QSTと社会について

QSTは、平成28年4月、放射線医学総合研究所と日本原子力研究開発機構の核融合研究開発及び量子ビーム応用研究の一部を移管・統合することで発足しました。ここでは、その研究が社会にどう役立っているかを紹介します。



QSTの環境に対する取組

エネルギー消費量の削減



空調機の熱源の切り替えやピークカットの実施、照明器具のLED化などの取組を通じ、QSTは2016年度以降の5年間で平均「3.3%」のエネルギー消費量削減を実現しました。今後も、さらなる省エネ化を進め、地球環境に優しい組織を目指します。

リチウムの安定確保へ



核融合炉の燃料製造に必要となるリチウムの安定確保を目指して、QSTはイオン伝導体をリチウム分離膜として利用する「イオン伝導体リチウム分離法(LiSMIC)」を開発し、海水からリチウムを回収する革新的な基盤技術を確立しました。この技術は、使い終わったリチウムイオン電池からリチウムを取り出して再利用する場面での活用が期待されています。

QSTと研究について

QSTでは、国内外と連携して様々な研究を行っています。各部門が国内屈指の研究力を有し、時には部門間で連携しながら進める研究は、まさに量子の未来を切り拓く現場そのもの。ここでは、その一部を紹介します。



QSTの研究の特徴 01

大規模・長期に渡る研究の遂行

国立研究開発法人であるQSTは、国から与えられたミッションに基づき研究開発を行っています。QSTが行う研究開発は、民間や大学が単独で実施することが困難であり、また、大規模な予算を必要とし、更に研究成果の創出まで長期間を要するものがほとんどです。例えば、今や保険適用されている「重粒子線がん治療」は、1994年に臨床試験が開始され、先進医療への指定を経たのち保険適応に至るまで20年以上の月日を要しました。また、重粒子線がん治療装置「HIMAC」の建設には、約326億円の国費が投入されています。



QSTの研究の特徴 02

異なる部門間の連携によるシナジー

QSTでは部門毎に独自の研究開発を進める一方、部門横断型の研究プロジェクトも推進しています。例えば、重粒子線がん治療の高度化や、治療装置の小型化を目指す「量子メスプロジェクト」では、量子生命・医学部門が研究を進めてきた「マルチイオン照射技術」、量子ビーム科学部門が研究を進めてきた「レーザー駆動イオン加速技術」、量子エネルギー部門が研究を進めてきた「超伝導技術」、それぞれの高度な知見を総動員して研究を実施しています。小型重粒子線がん治療装置「量子メス」の完成に向けて着実に近づいています。

QSTの主な研究部門やプロジェクトについて



放射線科学で
健康と安心を支える

量子生命・医学部門

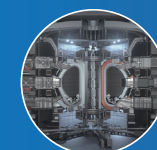
量子生命・医学部門では、重粒子線がん治療研究や分子イメージング研究を中心とした「放射線の革新的医学利用のための研究開発」、量子の目と手で生命の謎を探る「量子生命科学」、原子力災害等への備えと対応のための「放射線影響・被ばく医療研究」を行っています。



量子ビームで明日の
テクノロジーを切り拓く

量子ビーム科学部門

量子ビーム科学部門では、様々な量子ビームの発生・制御や、これらを用いた高精度な加工や観察などに係る最先端の技術開発を推進しています。また、量子ビームの機能を活用して世界を先導する研究開発を推し進めており、わが国の科学技術・学術の発展及び産業の振興に寄与しています。



核融合エネルギーの
実用化を目指して

量子エネルギー部門

量子エネルギー部門では、環境に優しく安全性に優れた“地上の太陽”を実現するため、国際協力を通じた核融合エネルギーの研究開発を進めています。「ITERの研究開発」「核融合プラズマの研究開発」「核融合理工学の研究開発」を3本柱に、総合的に研究開発を推進しています。



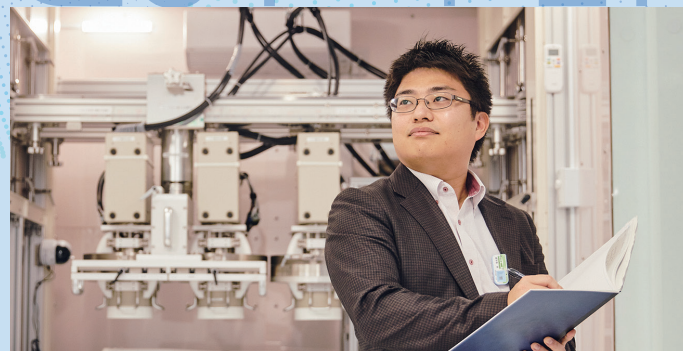
組織や拠点を越えた、QSTの
未来を担うシナジーを創出

QST未来ラボ

QST未来ラボは、理事長直轄によるバーチャルな組織です。組織及び拠点横断的な融合研究の推進や外部と連携した拠点形成による社会実装を目指す新しい研究領域の開拓やイノベーションの創出を目指しています。「脳疾患量子バイオマーカー創薬拠点の構築」や「がん死ゼロ健康長寿社会の実現を目指す量子AI開発」などの研究開発に取り組んでいます。

QST×PERSON

QSTの人たち



谷 幸太郎 2014年入構 研究職

健康福祉学部放射線学科(学部)
工学系研究科原子力国際専攻修了(大学院修士課程)

大学では放射線医学を、大学院では保健物理学を研究。その知識を生かして働きたいと思い、入構。現在は、被ばく医療の研究から治療へのアプローチまで行っている。



山崎 莉穂 2017年入構 技術職

工学部応用化学・生物化学科卒(学部)
理工学専攻物質・生命理工学教育プログラム修了(大学院修士課程)

就職活動中、那珂研究所の核融合研究に興味を持つ。他にはない最先端研究に直接携われる環境で働きたいと思い、入構を決意。



辻 ひかり 2021年入構 事務職

農学部食品栄養学科卒(学部)
農学研究科応用生命化学専攻修了(大学院修士課程)

大学院で研究を行う中で、研究者をサポートする職に就きたいと思い、入構。QSTでならば、自身が思い描くキャリアプランを実現できると思い、仕事に進んでいる。



平泉 佑弥 2018年入構 事務職

法学部卒(学部)

就職活動の中で、放射線治療を行うQSTの研究内容に興味を持ち志望。入構後は財務部契約課で調達業務に従事した後、現在経営企画部企画課に所属。

01 分野横断的な連携が、研究を加速させる

私は現在、放射線医学研究所にて、被ばく医療のための研究開発に携わっています。主に担当しているのは、体内に侵入した放射性物質の測定・評価です。放射線にも色々種類があり、種類ごとにアプローチ方法が変わるため、様々な見極めながら分析を行っています。また、私たちは物理学的観点から放射線量を分析しますが、QSTには被ばく医療専門の医師や、動物実験などの基礎研究や応用研究をされている研究者など様々な専門家がいらっしゃいます。分野横断的な連携によって、放射線量の調査分析から人体への影響評価、さらには診察や治療まで一貫して実施できる上に、互いに知識を享受し合える環境は、研究者にとって非常に魅力的な環境だと思います。



02 被ばく医療の可能性を広げ、未来につなぐ

放射線医学研究所は、放射線医療の最先端研究施設です。日々の研究に留まらず、放射線事故の際には、実際に患者さんを受け入れることもありますし、放射線を扱う可能性のある機関向けの研修なども実施しています。研究者として結果を残さなければならない中で、研究とそれ以外の業務との両立は、正直難しいです。しかし、研修には消防隊員や警察官など多種多様な職種の方々に参加しておられ、その中で生じた疑問や意見は大変貴重で、新たな発見につながっています。こうした多角的な視点の蓄積は、未来の事故対策に生かすことができますので、得た知識を後世に伝えながら、被ばく医療の発展に貢献していければと考えています。

01 核融合研究の土台を築く、データ管理

現在、那珂研究所先進プラズマ研究部先進プラズマ統合解析グループに所属しています。超伝導トカマク実験装置「JT-60SA」を安全に稼働させるための制御から、外部研究機関との窓口業務まで幅広い業務を担う部署で、主に実験データを管理・提供するためのシステム開発を担当しています。研究者にとって、研究の要となる実験データは何よりも大切です。その実験データが不正にアクセスされないよう、安全かつ利用しやすいデータ管理を心掛けています。また、システムのトラブルに備えて、常に対策を考えることも重要な仕事です。データ管理は研究を支える大事な土台ですので、安定した運用を続けながら、より便利に使えるシステムを目指したいです。



02 安心してキャリアを積める環境がある

QSTには、年次や立場に関係なく成長できる機会がたくさんあります。私自身、研修への参加や学会発表などを経験することで、着実にスキルアップしていると感じています。また、データを簡単に利用できるようシステムを改善した実績が評価され、理事長表彰を受賞したこともあります。今までの成果が認められ、大きなやりがいを感じました。技術職の女性は、まだまだ少数ですが、困ったときは上司や先輩に何でも相談でき、働きやすい環境だと思います。実際に、研究職や技術職の方で、産休・育休を取得した後、仕事に復帰されている先輩方も多くいます。サポート体制も整っていると実感していますので、安心してキャリアを積んでいきたいと思っています。

01 研究開発成果の最大化に向けた、最適な支援を

私が働くイノベーションセンターイノベーション戦略課は、産学官連携を促進し、研究開発成果の最大化を目指す部署です。その中で、私は、外部機関との協力協定等の手続や、企業、大学等の研究員や有識者などを受け入れるための調整業務に携わっています。また、外部からの助成金等外部資金について、機構内の研究部門に対する支援等の窓口業務も担当しています。この仕事の醍醐味は、研究に関する最新情報など興味深いお話を聞くことができることです。様々な研究部門の方々とのやりとりから、自身の視野が広がっていくことに面白さを感じています。



02 事務の立場を忘れず、研究者に寄り添う

様々な方と連絡を行う中で、各々の立場を考慮しつつ着実に業務を進めていく。それがこの仕事の難しさです。時には、事務職と研究職の目線が異なることもあるため、端的な説明ができるよう努めています。私は学生時代、研究をしていたこともあり、研究者の想いや苦勞を想像できるため、研究者目線を大切にしている部分があるかもしれません。それでも、事務職としての責務は果たさなければなりませんから、譲れない点は線引きしつつ、両者にとって負担のない着地点を探すように心掛けています。今後は、より高い調整力を身に付けながら、QST全体の発展に貢献できればと思います。

01 視座を高く持ち、組織全体を見渡す

経営企画部企画課では、QSTを管轄する文部科学省からの連絡を受けるとともに、機構内の各部門への連絡及び調整業務を行っています。当課の役割は、国と機構をつなぐいわば「窓口」です。国から受けた依頼を適切な部署につなぐためには、各部署の業務内容を適切に把握していなければなりませんし、内容によっては部署をまたぐ案件もありますから、広い視野を持って業務に臨む必要があります。また、国の政策や方針が多分に影響する業務でもあるため、情報のアップデートも欠かせません。柔軟な対応が求められるため大変ではありますが、非常にやりがいがあります。



02 研究に集中できる環境づくりを目指して

QSTは国から交付される予算をもとに運営されている組織であるため、国に対して研究成果を評価してもらう必要があります。私が所属する企画課は、評価項目に沿って研究成果を取りまとめる作業を担当しています。評価結果は、QST全体に対する評価となるため、責任の重い業務で大変です。しかし、業務で分からないことがあれば、上司や先輩方に気軽に質問することができる環境なので、安心して取り組んでいます。これからは、より多くの経験を積みながら、研究開発促進に貢献していきたいです。QSTは研究や技術開発あってこそその組織ですから、研究に注力できる環境作りに努めたいと思います。

QSTの働きやすさについて

QSTでは、共に働く職員が安心して長く務められるよう、様々な取組を行っています。ここでは、福利厚生や教育研修など、その一部を紹介します。ぜひ、応募を検討する際の参考としてください。

福利厚生

QSTでは、充実した福利厚生を整えています。社会保険（健康保険、厚生年金保険、科学技術企業年金基金、雇用保険、労災保険）加入はもちろん、研究拠点によっては、職員向けの宿舎があります。また、各種休暇制度や諸手当も用意しています。詳しくは、下記を参照してください。



代表的な制度例	休日関連	完全週休2日制（土・日）、祝日、年末年始（12月29日から翌年1月3日まで）休暇、年次有給休暇（20日）、特別休暇【夏季休暇（5日）、リフレッシュ休暇（2日）、ボランティア休暇（5日）、結婚休暇（連続5日）、産前・産後休暇（産前6週・産後8週）等】、育児休業制度（3歳まで）、介護休暇制度（延べ6ヶ月まで） など
	手当関連	諸手当（地域調整手当、超過勤務手当、通勤手当、扶養手当、住居手当、寒冷地手当、特殊勤務手当） など

主な教育研修制度

初任者研修	新入職員を対象とした導入研修。QSTの使命、事業内容、社会人として必要なビジネスマナー等、QST職員として必要となる基礎的な内容の研修
フォローアップ研修	入構半年後に実施する新入職員を対象とした研修。各人が入構後半年間の振り返り、課題の抽出を行う、次のステップに向けた研修
階層別研修	中堅職員研修、マネジメント基礎研修、管理職昇任者講座など、立場・役職に応じた研修
海外研修員派遣制度	海外の研究機関へ職員を派遣し、更なる能力向上を図ることができる制度
資格取得費用補助	取得を奨励している資格の取得費用を負担。一部の資格については取得時に褒賞金を支給
その他の教育研修制度	QST内で英語能力検定試験を年2回実施。また、省庁が主催する研修にも参加可能

職種別のキャリアパス

事務職	様々な部署を通じて、幅広い分野での業務を経験します。各々のキャリア形成の中では拠点をまたいだ異動をすることもあり、QSTが展開する多様な研究開発の現場を肌で感じながら、組織全体の中核的な人材へと成長してもらうことを期待しています。また、将来的には管理職として、部下の育成・指導や組織運営にも関わってもらうことを期待しています。
技術職	自身の従事する業務に関しての知識を深めるとともに、日々の業務を通じて専門性を高めていき、QSTを支えるエキスパートとして成長してもらいたいと考えています。将来的には、培ってきた技術を若手に継承するとともに、管理職として、部下の育成・指導や組織運営にも関わってもらうことを期待しています。
研究職	各研究拠点で行っている固有の研究開発業務に従事し、専門性を高めつつ、画期的な研究成果の創出に取り組んでもらいます。将来的には、研究開発を通じて培ったスキルを活かし、管理職としてプロジェクト管理まで担える人材となってもらうことを期待しています。

ダイバーシティについて

QSTは、平成30年度に「ダイバーシティ推進室」を設置し、女性職員採用促進やキャリア育成・支援などの取組を行っています。「未来戦略」で掲げる「多様な人材の活用」を目指し、多様な発想や経験を有する職員が、国籍・性別・年齢・障がいの有無に関わらず、主体性を持って活動できる環境の実現に取り組んでいます。

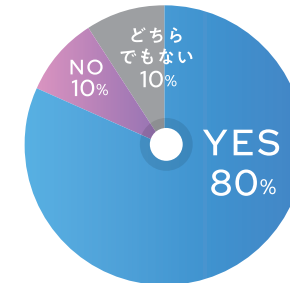
その他の採用情報も掲載中！
リクルートガイドはこちらから



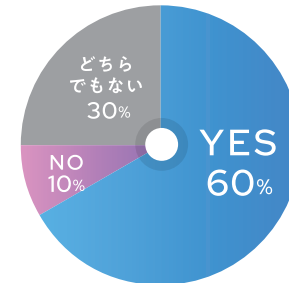
職員アンケート

QSTは、どんな職場環境なのか？皆さんが知りたいそんな情報を、ここでは「職員へのアンケート」を通じて紹介します！働きやすさや福利厚生など、様々な項目をご覧ください。

Q1 QSTは良い組織だと思う



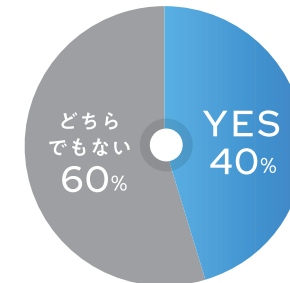
Q2 自分はQSTへの愛情がある



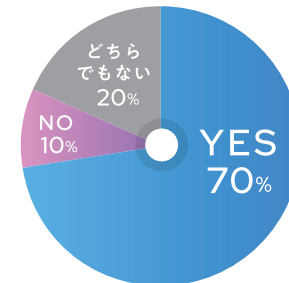
Q3 QSTは働きやすい職場だ



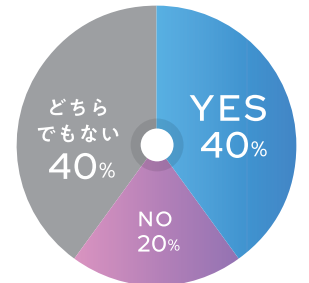
Q4 QSTは女性が働きやすい職場だ



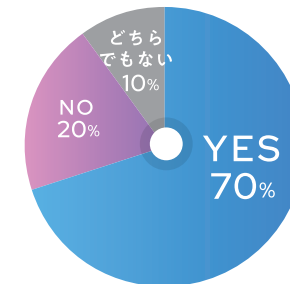
Q5 仕事にやりがいを感じている



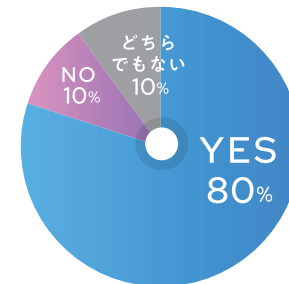
Q6 福利厚生は充実していると思う



Q7 自分も社内の制度を活用している



Q8 人間関係の風通しは良いと思う



Q9 QSTで叶えたいことを教えてください

- 量子メスや標的アイソトープ治療が普及し、がん死ゼロ社会が実現すること
- 幅広い仕事に対応することができるジェネラリストになること
- 資格取得奨励制度を活用して資格取得したい
- 重粒子線がん治療装置が国内外に普及する光景を目の当たりにしたい
- 自分にとってのワークライフバランスを実現したい

Q10 QSTの「お勧めポイント」を教えてください

- 「量子」をキーワードに多様な事業を行っていること
- 最新の技術研究に貢献できる点
- 上司・先輩に良い方が多く、働きやすい雰囲気がある
- 休暇制度が充実しているところ（安定感抜群）
- 研究者、技術者、医療従事者など、多くの職種の方と一緒に働ける
- 安定しているので人生設計が立てやすい